

シンポジウム

看護実践者から考える看護研究

名古屋大学医学部附属病院

高井 奈美 (慢性疾患看護専門看護師)

I. はじめに

第1回なごや看護学術集会設立記念シンポジウムにおいて看護実践者の立場から、看護研究とは生活者のQOL向上を目指した看護実践の質向上と組織改革であることを述べた。これは、私が慢性疾患看護専門看護師の教育課程で学んだ看護実践研究の意義である。看護実践研究は、看護の実践現場で日々変わりゆく様々な現象に臨機応変に対応できる看護師の能力を育むことができる。それは、看護の実践の場では研究は難しいものであり、“一部の看護職が行うもの”と捉えがちになりやすいが、実践者だからこそ気づく課題は日常の中でたくさん出会うことができるからである。

今回、看護実践者に近い看護実践研究の方法を日々の業務の中で具体的な取り組みを含めて自身のフィールドでの研究成果を紹介する。

II. 看護実践研究とは

看護師自身のフィールドで起きている日々の疑問や問題について幾度も分析を繰り返しながら課題を明確にし、その問題解決に向けた方策を考え成果を導き出す。この問題解決プロセスの中で看護職は主体的に生活者のニーズを捉える力や発展的で継続可能な組織変革の方策を考える力を養うことができる。

看護実践研究の特徴は、現場で看護実践している看護師が実践者かつ研究者となるため、看護実践者＝内部の第一人者が、課題を客観的および主観的な見方で捉える複眼的アプローチである。また、データの収集の場が研究者（実践者）の看護実践の場となることから、研究者の実践活動そのものが研究プ

ロセスの一部となることである。その看護実践研究を進めるにあたってのプロセスは大きく3つのフェーズに分けられている。(黒江ゆり子：看護実践研究の意義と方法 看護研究, 50 (6), 522, 2017 から引用・一部改編)

<第1フェーズ> 自施設・自部署の実態把握および看護実践上の課題の焦点化・明確化

1. 自施設・自部署の実態について、所属する専門職の人数や利用者の傾向、組織運営体制など、利用可能な各種データに基づいて分析し、多視的に把握する(現状分析)し、自施設・自部署の看護実践における課題を焦点化する。
2. 焦点化された課題について同業他施設(自施設と同様の規模や設立趣旨をもった施設を選択)はどのような状況かなど、体系的に文献を調べる等の形で把握する。
3. 課題を解決・探求するための取り組み方法を考案・開発するとともに研究計画を策定し、倫理審査を受審する。研究計画の策定は、研究に求められる倫理原則に基づいて行われる。

<第2フェーズ> 研究計画に基づく取り組みの実施と結果の把握

1. 第1フェーズで考案・開発した方法を実施し、結果の確認を通して、一層効果的な取り組み方法に発展させる。
2. 考案・開発した取り組み方法を組織的な取り組みに発展させる。そのために、ケアにかかわる人々に広く加わってもらうように働きかける。自分たちの認識をできるだけ多くの組織メンバーに伝え、メンバーとともに課題解決に取り

組む。

<第3フェーズ> 取り組みの成果の把握および看護のあり方の探求

1. 一連の取り組みの結果を確認し、成果を明確にする。どのような看護実践が提供されるようになったか、看護職はどのような認識のもとで実践活動を行うようになったかなど、取り組みにかかわった人やケア提供を受けた人の意見を把握し、利用者ニーズに即した実践になっているかを確認する。
2. 研究成果を踏まえて今後の課題を明確にし、将来的な対応を含めて報告書や論文等にまとめる。同時に、今後の看護実践に関する新たな提言を行う。取り組みは組織的かつ継続的な実践活動にすることができたか、またそのためにはどうすべきかという視点のもと、取り組みの意義・意味を見極める。

Ⅲ. 看護実践研究の取り組み

上記で述べた看護実践研究のプロセスに沿って、私自身の日々の具体的な看護実践から生活者のQOLの向上を目指した看護実践の質の向上と組織改革についての研究成果を紹介する。

<フェーズ1>

【きっかけ】当院の糖尿病透析予防外来（指導外来）に通院する患者を診ていると、面談毎に“生き生きした表情に変わってきた”“腎症のステージ改善をしている患者が増えた”。患者の変化に関与している医療者、特に看護師の役割がどれだけ寄与しているのだろうか？と日々の業務を通して感じる。

【研究背景】当院は、大学病院で高度・急性期医療を提供する立場であるが、利用者のほとんどが高齢者や慢性疾患の急性増悪、疾患・症状管理目的で通院している生活者が多い。近年、新規透析導入患者の半数が糖尿病性腎症を原因になっていることから、糖尿病の重症化予防が注目されている。当院では糖尿病内分泌内科と腎臓内科に通院する患者が約5700名程度/月で透析導入予備軍患者が多い。

【現状分析】通院患者数に対し、糖尿病透析予防外来を利用できる枠が少なく、利用者が限定されている。その理由は透析予防外来に参画できる看護師のマンパワー不足がある。また看護技術である生活指導の実際が多職種に認識されていないことから依頼も少ない。

【研究目的】当院における糖尿病透析予防外来における看護師の役割を明確にする。

*指導外来における看護師の役割は、日本糖尿病教育・看護学会が示している『糖尿病腎症各期における看護師の役割』に準じた看護実践を行っている。

【研究方法】対象患者は、当院の透析予防外来に3回以上通院する糖尿病腎症2、3期にある患者21名とした。対象患者の初回と研究観察期間内の最終透析予防外来時のHbA1c、尿アルブミン・クレアチニン比（UACR）、 Δ eGFR、腎症ステージ区分を観察し、腎症改善群（UACR改善30%以上）13名、腎症維持群（UACR改善0-29%以内）4名、腎症悪化群（UACR悪化）4名に分類した。

<フェーズ2>

【研究結果】結果、腎症改善群13名のうち7名は、医師の処方変更などなくUACRが改善し、7名中6名は腎症ステージ区分が改善した。腎症改善群のほとんどは体重減少、平均血圧の低下も認めHbA1cの改善もあった。また、指導外来利用回数が多ければ多いほど腎症改善に至っていた。患者の指導外来への想いの聞き取りでは、「一緒に考えてくれる人がいる」「話を聴いてくれる」「具体的な症状マネジメントを教えてくれる」などの意見を得て、看護師の存在が患者の日常生活に大きく影響していることが分かった。その後、研究結果を指導外来チームで共有した。

<フェーズ3>

【組織への働きかけ】看護師の生活指導や相談業務が患者のモチベーションとなっていることを共有し、多職種へ看護師の役割の認識向上になった。また、研究成果を学会で発表することで、指導外来にかかわりを持たない看護師からも研究成果を

知ることによって慢性疾患患者への生活指導の重要性の理解に繋がり、指導外来に関わりたいと希望する看護師が増えた。同時に腎症改善に効果があることが糖尿病内科内で認識され、指導外来枠拡大へつなげた。拡大された枠に対応できる看護師の育成の重要性も共有し、看護師育成プログラムをチーム内で立ち上げ、次年度から運用開始予定となった。

IV. まとめ

看護実践研究は、生活者のQOLを向上させるために、無意識的に自分たちの看護そのものをタイムリーに修正、改善しながら臨機応変に対応している。この看護実践知は未来の看護職育成のためには可視化することが重要である。すなわち日々の看護上の問題は看護研究によって可視化されるべきである。しかしながら、日々の疑問が研究的視点で捉えることができるようになるためには、研究的視点で事象を捉えることに長けている看護大学との連携体制が充実することで養うことができると考えられ、実践者と研究者がつながる場の構築ができることが望まれる。

参考・引用文献

- 黒江ゆり子，北山三津子：看護実践研究の可能性と意義 その1. 岐阜県立看護大学紀要. 14 (1). 2014
- 黒江ゆり子:看護実践研究の意義と方法. 看護研究. 50 (6). 2017